

「熊本義泰作陶展」ギャラリートーク

私の歩いた道

～絵画・陶芸・まちづくり～

日時：平成29年11月11日

場所：エイブル2階交流プラザ

私は昭和19年に浜で生まれ、鹿島高校に進学し、美術部に入学しました。鹿島高校の美術部は非常にレベルが高く、また岩永京吉先生や先輩たちにも熱心に指導していただきました。特に20歳頃までの環境は、ものづくりに大切なのではないかと思います。

絵描きになりたいという気持ちがあり、仕事をしながら大阪市立美術館の研究所に通いました。そこには指導者として日本をリードする画家たちがいて、指導して頂きました。そういう影響もあって私自身もかなり燃えて絵を描いていました。

24歳の時に、大阪の心斎橋で人物画ばかりの個展を開きました。



その時、画商から契約しようという話がありました。留学や雑誌掲載の話もありましたが、私はまだ自分に自信がなくて、果たしてそれに乗っかっていいものか悩みました。絵を描く情熱が減少してきて、新しいことを始めてみたいと思い、興味があった焼き物の展覧会に行きました。川喜田半泥子の最後の弟子・坪島土平さんの作品に出会い、三重県の津の窯元を訪ねてみました。そこは松林の中に窯や轆轤場があって雰囲気がよく、こういう生活をして一生を送ってもいいのかなと思いました。瀬戸へ焼き物の基礎を習いに行き、荒川豊蔵、加藤唐九郎や京都の木村盛和さんを訪ねました。木村さんは日本伝統工芸展に天目で出品していました。たまたまその日は会うことができ、2、3時間話し込みました。中国の宋時代の焼き物を評価するという価値観が同じことが分かり、1年くらいなら来てもいいよと言って頂いて、結局7年間、内弟子として修行をしました。



34歳で故郷に帰り独立しました。多良岳の岩石を使って油滴や禾目天目を作り、翌年から日本伝統工芸展などに出品しました。私の天目の作品を鑑みた作家たちから「木村先生」とのかかわりを聞かれ、天目の作品を創っているのは師の感性の中でしか作品が出来ないのではないかと思います。その頃、鈴田照次先生がご健在で、「青磁ばやらんね」というような助言もあり、青磁に取り組むことになりました。



熊本義泰さん

私が焼き物をやるのに手本にしたのは、中国の宋時代の焼き物です。産地ごとにレベルの高い様々な焼き物があります。その中で、興味を魅かれ取り組んで手本とした作品を紹介します。

汝窯（じょよう）は、北宋時代の官窯とされています。故宮の皇帝用の食器なので、皿の上に目を乗せて皿ごと収縮させるなど、非常に手が込んでいます。



汝窯 「粉青葵花式小皿」



修内司窯「青磁下蕪瓶」



郊壇窯「青磁輪花鉢」

南宋官窯。宋の南宋時代に、修内司窯（しゅうないしよう）と郊壇窯（こうだんよう）という二つの窯がありました。郊壇窯は貫入のある青磁、修内司窯は「粉青」の青磁です。

下の写真は龍泉窯。いい色をしています。青磁の良い時は、青の色が水色。時代が下がってきてだんだん緑っぽくなって、元代の天龍寺青磁になります。

右の写真「銘馬蝗絆」は平重盛のころに日本に渡ってきたもので、室町時代・足利義政の時に割れてしまい、中国へこれと同じものを作ってくれと送ったら、「今の時代こんなに良いものはできない」と、楔で繋いで返ってきたそうです。楔の形から日本で馬蝗絆（ばこうはん）という名前がつけました。



龍泉窯
「青磁輪花碗 銘馬蝗絆」



龍泉窯
「青磁鳳凰耳瓶 銘萬聲」



建窯 曜変天目茶碗
「稲葉天目」



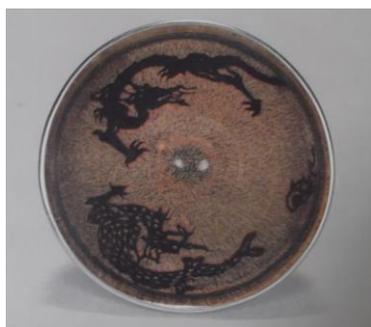
建窯「油滴天目茶碗」



建窯「禾目天目茶碗」

建窯は、天目の窯で、左端の写真は曜変天目。非常に魅惑的。

真ん中の写真は油滴天目の一番良い作品で、油滴が立体的で品のある器です。金覆輪は日本にきてからかぶせてあります。口のところは流れてちょっと褐色になるので、金でしめた形。右端は禾目天目。私も禾目をやりますが、禾目の一番良いのがこの作品です。建窯は 300 年くらい作っていますが、形がほとんど一緒です。



吉州窯「玳皮天目碗」

吉州窯は玳皮天目（たいひてんもく）の窯で、黒い釉薬が下にあり、その上に灰釉をかけてから文様を抜いています。型紙を使ったようにも見えますが、湾曲しているのも紙では難しいかもしれません。中国の宋時代の焼き物は、宝石的なものを作りたかったのではないかと思います。青磁の場合は翡翠、白磁は象牙など。左下の写真は鼈甲を狙ったのではないかと思います。右下は木の葉天目。私の師匠も木の葉天目をたくさん作りました。師匠は棕の葉を使っており、晩秋には棕の葉を採りに丹波の山の中に行きました。

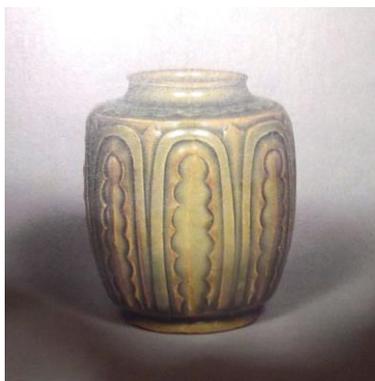


吉州窯「玳皮天目碗」



吉州窯「玳皮天目碗 木の葉天目」

下の写真は、耀州窯の翠の青磁。私は20代の頃これを見て「翠の青磁があるんだ」と興味を持ちました。それで、こちらに帰ってきてから、翠をメインにしようと思い組み始めました。角が少し褐色かかった色になってしまうので、何故なのか考えて行き着いたところが、青磁は還元焼成するのですが、最高温度で火を止め、自然冷却する時に表面が酸化され、薄いところが褐色になるのではないかと思います。それで、冷却時に還元で冷ますやり方を始めました。現在では、1025度で還元を止め、自然冷却をしています。



耀州窯「青磁刻花蓮弁文壺」



耀州窯「牡丹唐草文瓶」



熊本義泰作「翠青磁駱駝合子」

技法としては、自分なりのものを作らないといけないと思い、「貼り付け文」を始めました。これは日本伝統工芸展に出した「青磁麦文鉢」。麦文のところだけ、土が上に載っています。まず、まだ生地が柔らかいときに、鉛筆で下書きをします。土を上に載せるので、なるべく柔らかい時がいいですが、あまり柔らかいと鉛筆で描けません。また、文様を入れている間に下の土が乾いてきてしまいます。伝統工芸展の搬入が7月で、6月の始め頃は湿気はあるのでちょうどいいのですが、部屋を閉め切ると大変蒸し暑いのです。近年は、加湿器をかけて乾燥しないようにしながら作っています。右上は、液体のゴムで土を載せないところをマスキングしている写真です。この上に共土を刷毛で載せ、ゴム液をはがして仕上げます。これを完全に乾燥させて素焼きをし、釉薬をかけて焼くのです。



伝統工芸展に出すのが7月で、6月は麦が実る頃。私の家は麦畑の真ん中にあるので、周りにあるものを文様にしようと麦文にしましたが、麦もいろいろな文様の展開ができると思います。最近は紫陽花なんかもやっています。

そういうことで焼き物を今までずっとやってきました。今、中国の青磁で日本で高く評価されているのは青系統。国宝にあるのは青だけで、翠はさきほど紹介した耀州窯の牡丹唐草文瓶が国指定重要文化財に指定されているだけです。中国ではまだそれほどレベルの高い翠はできていなかったと思います。これからまだもっと良い翠になれる要素はあるのかなと思っています。何とか頑張りたいです。



続いて、浜のまちづくりの話に入ります。

私が浜に帰ってきたのが昭和54年。子どもの頃は、浜はもっと町だと思っていたのですが、帰って来たら、寂れていたんです。平成5年に『クラシック・イン・はま』というグループができて、私も参加して浜の活性化に取り組み始めました。浜の歴史的生活文化を掘り起こし、皆さんに自分の街を認識してもらおうと昼はシンポジウム、夜は酒蔵コンサートを開催しました。シンポジウムでは、1607年にキリスト教会が建てられたことや、その当時の住民が豊かな暮らしをしていた話も聞きました。いろいろな催しをしていると、来た人が浜の建物をとても評価してくれました。これは残さないといけない、と文化庁の重要伝統的建造物群の保存地区（以後、重伝建）を目指すことにしました。重伝建になると修理に補助が出るのですが、当時、市の行政にはその気運がありませんでした。そこで、県文化財課課長浜を見てもらい、是非残そうと言って頂きました。そして、有田に視察に来ていた文化庁の調査官を浜に連れてきてくれました。文化庁と県から鹿島市に話があり、鹿島市教育委員会で建物の調査をすることになりました。九州大学、熊本大学、久留米工業大学の都市工学専門の先生方と学生達に調査してもらい、調査報告書ができました。その時点で、鹿島市は「肥前浜宿まちづくりのマスタープラン検討委員会」を発足させました。その中のワークグループメンバーを中核として、私が初代の代表となり『肥前浜宿水とまちなみの会』という70人くらいの民間団体を立ち上げました。

「継場」という江戸時代の問屋場（飛脚の取次場）だった建物を市単独で見本として修理していただきました。継場の隣には、明治時代に建てられた郵便局があり、二つの時代の郵便施設が並んで残っているのは珍しく、歴史的に意味があると思います。活動をしていく中で、平成18年によりやく文化庁の重要伝統的建造物群保存地区になりました。

環境や景観に配慮したまちづくりをしようとしていた頃、浜川の河川改修が始まりました。「コンクリートブロックではなく、景観や生態系を考えた川づくりをしてほしい」と土木事務所に河川協議会の結成をお願いしましたが、受け入れてもらえませんでした。そこで、『水とまちなみの会』で『浜川と有明海を考える部』を立ち上げ、住民サイドの河川改修マニュアルを作り、土木事務所に提出しました。

浜のまちづくりに興味をもち、会議にも来てくれていた県の土木部の住宅建築課長さんの紹介で、県の土木部長さん、河川砂防課長さんと話をさせてもらい、「河川協議会」を作ってもらいました。私たちは、護岸の大木も残してほしいとお願いしたのですが、土木事務所は、川の中だから残せない、と。そこで、前例がないか探したところ、南小国町にありました。平成3年の河川改修で、2本の木が残されていたのです。「河川協議会」で南小国町の写真を見せ、現地に出向いてもらいました。そして、再度お願いをして、ようやく木を残せることになりました。



南小国町河川改修後の大木



浜川の大木



小石に擬態するヤマノカミ

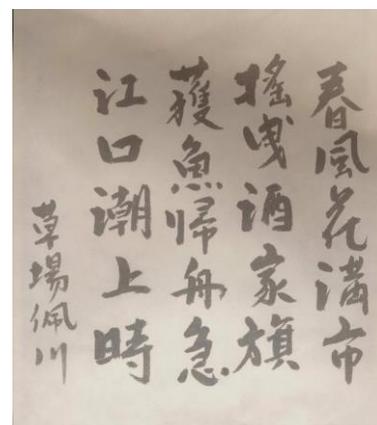
浜川は地下水が豊富で、生き物が豊かです。左の写真は、ヤマノカミ。カジカ的一种で、絶滅危惧Ⅱ種です。浜川には、鮎やアリアケギバチなど 25 科 50 種の魚たちが生息しています。

子どもたちと「浜川観察隊」「浜川で遊ぼう」などの活動をやってきました。鮎をつかまえて、焼いて食べたときは、魚嫌いの子どもまで美味しいと言ってくれました。

また、浜の場合は「酒」をテーマに町を立て直すことが必要だと思い、平成14年に『花と酒まつり』を発起しました。江戸時代に京都の松尾神社から勧請した酒の神様の祠があり、良い酒ができた、という感謝の祭りを始めました。

また、浜の「城の上（臥龍ヶ岡）」に、草場佩川が詠んだといわれる漢詩があります。「桜の花の香りが町いっぱい満ちている。新酒ができたという酒屋の旗がなびいている。潮が満ちてきて、魚を獲った船が急いで帰ってきている。」こういう町になりたいなあという思いで、この詩から「花」と「酒」を使って、名前にしました。

本年で16回目になりますが、今年は土日で約8万人の来場者がありました。こんなになるとは思いもしませんでした。



その他にも、いろんな催しをやってきました。



「なんでも鑑定団」 in 東蔵、「鹿島実業高校ファッションショー」やピアノリサイタル。「知事と語ろう 21世紀に残す佐賀県遺産 肥前濱宿」というシンポジウムも開催しました。また、『酒蔵通りに挑む』と題して、假屋崎省吾さんに花を生けてもらいました、私の焼き物も30数点使っていただきました。



また、スケッチ大会を『花と酒まつり』と同時にスタートさせました。鹿島市美術人協会の全面協力で行われています。毎年800人前後の参加者があり、たくさんの絵が生まれました。

『子どもといっしょにまちづくり』という事業は文化庁の助成で、

浜小学校の全校児童が総合学習で取り組みました。「浜町の名人」をレポートしたり、「浜が大好き」という歌を作ったり。それぞれの学年で、浜町のことをたくさん調べて発表してくれました。



茅葺き武家屋敷 旧乗田家(鹿島市重要指定文化財)

平凡社の日本の町並みという本に浜町が載り、それを読んで見学に来られた方がクド造りに非常に興味を持ち、寄付してくださったので、乗田家住宅を修復しました。左の写真は出来上がったところ。非常に堂々とした建物です。この辺の草葺きは天井が船底天井になっており、それを漆喰で固めています。その時も文化庁の助成を頂き、子どもたちの体験学習で、荒壁塗、土間叩きなどの体験をしてもらいました。



環アジア国際セミナー

近年、佐賀大学と協力し8月に「環アジア国際セミナー」を開催しています。カザフスタンやミャンマー、タイなど、アジア系の都市工学科の先生と学生80人くらいが地元へ4泊。浜の町をこれからどのように展開したら良いかという研究を発表してもらっています。今年はウィーン工科大学からも参加していただきました。

第37回全国町並みゼミ鹿島・嬉野大会

期日 平成26年11月7・8・9日

大会テーマ つなごう歴史遺産・みがこう町並み文化

サブテーマ 有明海で栄えた「塩田津」・「肥前浜宿」

基調講演 「伝統と文化」

鼎談 人間国宝鈴木滋人・元文化庁監査官刈谷勇雅・考古学者高島忠平

分科会	① 「町並み保存・活性化の入門」	田雑商店
	② 「地域に根ざした産業とまちなみ」・観光と酒蔵ツーリズム	エイブル
	③ 「防災とコミュニティ」	浄立寺
	④ 「つなぐ次世代へ歴史遺産を、そして全国の仲間へ ・子供たちと共に考えようこれからのまちづくり」	東蔵
	⑤ 「空き家の再生・活用を考える」	本応寺
	⑥ 「町並み保存と技術の継承」	西岡家
	⑦ 「暮らしと文化に根ざしたまちづくり」	志田焼の里博物館
	主催 第37回全国町並みゼミ鹿島・嬉野大会実行委員会 特定非営利活動法人全国町並み保存連盟	

3年前には、全国町並みゼミ鹿島・嬉野大会を開催しました。この時は私が実行委員長をやり、鈴木滋人さん、高島忠平さん、文化庁出身の刈谷さんの三人で「伝統と文化」という鼎談を基調講演としてやって頂きました。分科会の内容は、うちの町にとってはずべて大事なものでした。

「防災とコミュニティ」。浜の庄金地区、舟津地区は準防火地域なので、本来は草葺きは駄目です。国交省のいう準防火地域

は外観は燃えない材料しか使えない。しかし、文化庁は重要伝統的建造物群として残しなさいという。そうすると建築基準法違反になります。そこで、鹿島市では緩和条例を作り、防災計画を作り直しました。

「つなぐ世代」。私たちがやった後、果たして子どもたちがどれくらい本気になってまちづくりをやってくれるのか。最初の人たちのパワーがありすぎて、次になかなか繋がっていかないということがあります。そして、今一番大事な空き家の活用。修理したあと、どういう再生のまちづくりをしたら良いか、システムづくりを考えているところです。

「技術の継承」。この辺りの土蔵づくりの壁は『そり壁』。そり壁の土蔵づくりというのは他所にはありません。また、『くど造り草ぶき町家』もこの辺り独特の家屋です。有明海沿岸の伝統的な文化や技術を残したいと思い、全国大会を開催しました。

この催しは、町並み保存連盟の勉強会。町並み保存連盟の理事は専門家ばかりです。世界文化遺産の選定委員長、副委員長、それから選定委員の7人がこの保存連盟の中に入っています。私は、保存連盟の理事を2年間務めたのですが、いろいろな繋がりができました。

国交省の「手づくり郷土賞」公開審査会が東京工業大学で開催されたとき、私と中村さんが参加してプレゼンをやり、国交大臣賞を頂きました。

ユネスコの『プロジェクト未来遺産』。ここで賞状を渡している人が、世界遺産の日本の選定委員長の西村先生です。「重要伝統的建造物群保存地区を中心とした歴史的町並み、醸造文化の保存継承活動、地元の学校や行政と連帯し、次世代育成活動も積極的に行っており、体験学習や子どもガイドなどの育成活動も実施、また町並み保存と産業の連帯の成功例として酒蔵ツーリズムが注目を浴びている」ということで選定されました。



手づくり郷土賞公開審査会



日本ユネスコ・プロジェクト未来遺産

「肥前浜宿独自の歴史と生活文化にあふれた活力ある町の実現」というのが、マスタープランを作った時の私たちのテーマです。この町をどう生かすかというのがこれからの私たちに課された問題だと思います。

この50年ほど、私は創作やまちづくり活動などをやってきましたが、その時々に必要なに迫られて取り組んできたように思います。芸術にあこがれ、それをいかに高めるか、挑戦してきた日々でもありました。もっと良いものができるはずだと思っています。今後も続けることが力になるのではないかと考えています。